

# 古代エジプトにおける神・人・神話

## Gods, People and Myths in Ancient Egypt

田澤 恵子\*

Keiko TAZAWA\*

### 1 はじめに

昨今、ゲームや漫画、それらを原作とするテレビ番組や映画の題材として神話が取り上げられる機会が増え、古代エジプトの主要な神々も、本来の姿形とは異なる場合が多いものの、テレビやインターネットの世界に頻繁に登場するようになってきた。そして、そのおかげとでもいべきか、最近では古代エジプトの神々や神話について興味を持つ人々の数が増えている。そこで、本セミナーでは、そのような背景も含め、古代エジプトの神々や神話とはどういうものか、そしてそれらに対して古代エジプト人がどのように関わってきたのかということについて考える。以前から興味を持ち、自ら学習されてこられた方には、これまでの総括と整理をおこなないながら新たな知見と今後に向けての視点を獲得されれば幸いであり、最近新たに興味を持たれた方には、今後に向ける出発点になれば幸いである。

以上のような趣旨の下、本セミナーでは、まず古代エジプトの神話と神々について研究を進めるための前提として知っておくべきことの確認をおこない、続いて資料と研究方法の問題、及び研究史を整理する。次に、古代エジプト人が彼らの神々とどのように関わってきたのか(=神と向き合う姿勢)ということについて確認し、更にはその関わり方が異郷(異教ではない)の神々に対してはどうであったかについて考える。そして最後に、現代の我々に遺された古代エジプトの神話と神々について整理し、今後の研究に向ける展望をまとめる。

### 2 古代エジプトの神話と神々：資料と研究方法

古代エジプトの宗教は、モレンツ(1965)が既に指摘しているように、①北アフリカの東部に存在した古代エジプトと呼ばれる地域にほぼ限定された民族宗教であり、②経典や教義が確立された宗教ではなく儀礼中心の宗教であり、③教祖と呼ばれるべき立場の人間に創設され

---

\* 古代オリエント博物館研究員 (Curator, The Ancient Orient Museum, Japan)

た宗教ではなく自然発展型の宗教である。このような場合、古代エジプトの神々について、またその神々と古代エジプト人との関係性について考えるためには、彼らが残した神々の物語(神話)を確認することが必要であるが、古代エジプトの場合、文字で記された体系的で一貫性のある物語が欠如しており、これが古代エジプト宗教の特徴の一つとなっている。但し、これは神話そのものが存在しなかったことを意味するのではなく、様々なストーリーが口承で伝えられていたであろうことは想像に難くない。ただ、古代エジプト人にとってアイデンティティの基盤ともなりえるだろうこの世の成り立ち(創世神話)や人類誕生の物語(人類起源神話)に関して、彼ら自身が口伝のものを文字化してまとめたと思われる一続きの物語が、これまでに確認されていないのである(田澤 2017)。日本人にとっての『古事記』『日本書紀』『風土記』(平藤 2017)、古代メソポタミア人にとっての『エヌマ・エリシュ』『アトラム・ハシース』(月本 2017)、古代ギリシア人にとっての『神統記』(平山 2017)に相当するものが確認できないのである。そして、神話とはこの世のはじまりや人間の登場だけでなく、日常生活の様々な事物・場面の「最初の時」を語るものでもあるが、古代エジプトに関しては、そのような種類の神話も少ないことも特徴の一つとして挙げられるだろう。来世での復活・再生を目指し、ミイラ、葬祭小像、呪文(葬祭文書)、供養碑、護符を生前から準備するなど葬祭文化が非常に発達していた割には、『ギルガメシュ叙事詩』や『アダパ神話』(以上メソポタミア)、エデンの園(旧約聖書)、イザナミの火生みや天孫ホノニニギをめぐるコノハナヤサクヤヒメとイハナガヒメの姉妹の物語(以上古事記)のような死の起源を明示するストーリー性のある例が、古代エジプトでは見当たらないことは興味深い<sup>1</sup>。



図1：神殿レリーフに見られる神々の姿：文字資料と図像資料  
(カルナク神殿：アメン神・ムト女神・コンス神) (田澤撮影)

1 オシリス神話を古代エジプトの死の起源神話としてとらえるべきかどうかについては、それが人類全般の死の起源と考えられるかどうかについての更なる議論が必要であろう。

このような状況下で研究者は、パピルス、神殿や墓の壁面、オストラカ、彫像など様々な媒体に散見できる情報の断片を細かく確認しながら神々世界の全体像を導き出すことになった。これらの情報は、具体的には、文字資料と図像資料に分けられる（図1）。

前者には、葬祭文書（ピラミッドテキスト、コフィンテキスト、死者の書、アムドゥアト書、洞窟の書、門の書など）<sup>2</sup>、神々への讃歌（「アメン讃歌」「アテン讃歌」「ラー・ホルアクティ讃歌」「ナイル讃歌」「オシリス讃歌」「ミンの大祭碑文」など）<sup>3</sup>、供養碑文、文学作品、呪術文書、歴史碑文などがあり、後者には、彫像、神殿レリーフ、墓壁画、葬祭文書の挿絵、石碑などがある。

それではこのような状況下で、古代エジプト人が自分たちがどのように生まれ、世界が作られたと考えていたのかという問題について、わかっていることはどのようなことであろうか。古代エジプトの創世神話に関しては、主に以下の四つが挙げられる。

(1) ヘリオポリス神話<sup>4</sup>:原初の水(ヌン)からアトゥムが自ら出現し、原初の丘に立つ。アトゥムはやがて自分一人で（自分の唾液、くしゃみ、嘔吐、もしくは自慰行為など、その方法については様々なヴァージョンが確認されている）シュウ（大気の神）とテフヌト（湿気の女神）の二柱の兄妹神を生み、次にこの兄妹神がゲブ（大地の神）とヌト（天空の女神）を生んだ。最初、ゲブとヌトは仲が非常に良く、いつも抱き合っていてヌトの出産がままならなかったもので、二柱の神の間に父神シュウが入り（別のヴァージョンでは、「ゲブとヌトが喧嘩をしたので仲裁役のシュウが二柱の間に入った」とする）、世界に空と大地とその間を満たす大気が揃った。

これで自然界の全てが揃うが、ゲブとヌトはオシリス（王権）、イシス（玉座）、セト（混沌）、ネフティスの二男二女の神々を生み出す。以上九柱の神々が「ヘリオポリスの九柱神」として知られている。ちなみに、最後の四柱の神々は自然界（宇宙）と何ら関係していないことが明白であり、どちらかと言えば、王権起源神話として政治的、宗教的な意図を兼ね備えて組み込まれたことが指摘できる。

2 『ピラミッドテキスト』Faulkner 1969、『コフィンテキスト』Faulkner 2004 参照。『死者の書』Allen 1974 参照。『アムドゥアト書』Hornung and Abt 2007 参照。『洞窟の書』Hornung 1999 参照。『門の書』Hornung and Abt 2014 参照。

3 [アメン讃歌] Pap. Leiden I 350; Pap. Boulaq 17; Pap. Berlin 3055 参照。[ラー・ホルアクティ讃歌] BM EA826; Cairo 34051 参照。[ナイル讃歌] BM EA10222 (= Pap. Anastasi VII); BM EA10182 (= Pap. Sallier II)。他に部分的に残る資料については、杉他訳 1978 参照。[オシリス讃歌] Louvre C30, Louvre C286 他参照。[ミンの大祭碑文] ラメセス 3 世葬祭殿（メディネト・ハブ）。

4 ピラミッドテキストにストーリーの各部分が確認できるため、少なくとも第5王朝以前には成立していた思想であると言える。

(2) ヘルモポリス神話<sup>5</sup>: ヌンとナウネト (水)、ヘフとハウヘト (永続)、ケクとカウケト (闇)、アメンとアマウネト (不可視のもの) の四組の夫婦神 (「ヘルモポリスの八柱神」) が世界を創造した。その最初については、宇宙卵とするヴァージョン (宇宙卵型) と原初の水もしくは丘から成長したスイレン (出現型) が関与するヴァージョンがある。

(3) メンフィス神話<sup>6</sup>: メンフィスの主神プタハが万物の創造主として描かれるもので、第25王朝 (前8世紀末) の王シャバカの手による通称「シャバカ石」(BM EA498) に刻まれている。創造主プタハの心が考え、舌が命じることであらゆる食糧、滋養物、神々の供物、善きものが作られ、神々が姿をなし、市々やノモス (州) が設けられたとする。ヘリオポリス神話が、この世の誕生を神々による「生殖行為」(内田 2004) の結果としたのに対し、このメンフィス神話はストーリー性のある一連の物語 (神話) ではなく、どちらかというところ教義的なものであり「メンフィス神学」と呼ばれるべきものである。

(4) テーベ神話<sup>7</sup>: テーベこそが原初の水ヌンの所在地であり、原初の丘であるとし、その主神であるアメンが原初の時に最初に生まれた者であるとする。父も母もなく自ら生まれ、その後諸々の神が続いて生まれたとし、ヘリオポリスの九柱神、ヘルモポリスの八柱神など、全ての神はアメンの別の姿であると主張している。これも上記のメンフィス神話 (神学) 同様、教義的な側面が強く、やはり「テーベ神学」と呼ばれるべきであろう。

一方、人類誕生については、ヘリオポリス神話には二つのパターンが言及されている。一つ目は、ある時、シュウとテフヌトが行方不明になり、心配したアトゥムは、自由自在に動き回ることができる自らの眼に彼らを探しに行かせた。眼は無事にシュウとテフヌトを見つけ、アトゥムのところへ連れ帰った。息子と娘に再会できたアトゥムが喜びと安堵の涙を流すと、そこから人間が生まれ育ったというものである。もう一つのヴァージョンは、上記の話の最後が異なっていて、シュウとテフヌトと一緒にアトゥムのところに帰った眼は、自分が戻るべき場所に既に替わりの眼が収まっていることを知り、怒りの涙を流すが、その涙から人間が生まれたとするものである。また、太陽神ラーは生まれた時に母を見つけ出せずに孤独の涙を流し、そこから人間が生まれたとするもの、そして、太陽神ラーの涙と汗から人間が生まれたとする

---

5 アメンとアマウネト、ヌンとナウネトはピラミッドテキストでも言及されているが、いずれもヘルモポリス神話の内容との関連はない。四要素 (水、永続、闇、不可視のもの) が宇宙創成に関わったとする神学体系が具体的な形になったのは、新王国時代に入ってからと考えられている (Allen 1995/1988)。

6 当初古王国時代にまで遡るとされていた起源について、最近の研究では新王国時代後半期とする見解が主流である (Pinch 2002)。

7 Pap. Leiden I 350; Pap. Boulaq 17; Pap. Berlin 3055.



ものである。これらはいずれも、古代エジプト語の「涙」と「人間」を意味する単語の音に共通部分がある（異形同音異義語）ことから生まれた言葉遊びであると解釈されている。

### 3 古代エジプトの神話と神々：研究史

本稿では、上記のような資料を基にして、これまでどのように研究が展開されてきたのかを確認し、次項の「古代エジプト人と神々の関係」へと進むことにする。

19世紀半ばのヒエログリフ解読によって、研究者は上述したような文字資料を直接検討できるようになった。その結果、単一神教（自己の宗教の中で他の神々の存在も認め、パンテオンの中の一柱の神を主神として、その他を従属神とするもの）としての指摘はあったものの、まずはシャンポリオンのアメン・ラー研究に代表されるように、古代エジプトの宗教を一神教的にとらえる傾向が強くなった。しかし、19世紀後半に欧州列強によるアフリカ植民地化が進み、現地のトーテムズム社会の存在が明らかになると、それらとノモス（古代エジプトの行政区である「州」）やその標章の存在との近似性から、古代エジプトの神々をトーテムズムの観点から考える流れが起り、またそれと並行して、1881年のピラミッドテキスト発見によって古王国時代には既にエジプトが多神教社会であったことが明らかになり、研究者たちは認識を改めざるを得なくなった（Traunecker 2001）。

これらを受けて、20世紀初頭にはドイツのエルマンを中心とする学派が、エジプトの宗教は古代エジプト人自身がその時に対峙する現実に対応するための実際主義的（プラグマティック）なものであると提唱した。文明の初期に自然現象への脅威から生まれた神々はそのまま残り、次第に政治や社会が複雑化するにつれて、一神教に近づくような神観念が形成されていったとするこの説はその後引き継がれたが、一方でフランスなどでは、一部の研究者たちによって「古代エジプトの宗教は、エリートたちによる一神教である」との説が保持された。ここに至って、古代エジプト宗教の定義づけには以下の二つの流れが形成されたことがわかる：(1) 政治状況などへの現実対応型の实用主義的多神教、(2) 高度な観念的神概念（Traunecker 2001）。

そして20世紀中盤には、フランクフォートが議論の中心を「一神教 vs 多神教」から、より総合的・多角的なアプローチの可能性を追求する方向へと移した（Frankfort 1946）。一神教か多神教かという類型論的な二者択一式の議論ではなく、古代人の思考形態に焦点をあてた考究を進め、多くの研究者がそれに追従した（これらの研究者については、Traunecker 2001 参照）。

20世紀後半になると、エジプト学者であると同時に神学者でもあったモレンツが、古代エジプト宗教史とヘレニズム研究を関連付けた研究をおこなうなど新たな視点をもたらした（Morenz 1960）。その後、ホルヌク（Hornung 1971）とアスマン（Assmann 1991）が二大巨頭として登場する。特にアスマンは、古代エジプトにおける「現象としての多神教社会」と単一神（One God）の概念について研究を重ね、数々の成果を発表している（6.2 参照）。

## 4 古代エジプト人たちと神々の関係

本項では、以上のような背景のもとに、これまでに明らかにされてきた古代エジプト人と神々との関係について述べる。

### 4.1 二元論

「二元論」とは、宗教的、哲学的世界観の一つで、世界は二つの構成原理から成立するという考え方である。二項対立の組み合わせには、善と悪、光と闇、精神と肉体、平和と災い、この世とあの世などがあり、宗教的に有名なのはゾロアスター教であるが、古代エジプト社会にもこの二元性は確認される。例えば、エジプト全土の王は「両国（上下エジプト）の主（ネブ・タウィ）」と呼ばれ、この上下エジプトにはそれぞれを象徴する動植物と女神が割り当てられていた（上エジプト<エジプト南部>には、スゲとネクベト女神；下エジプト<エジプト北部>には、ミツバチとワジェット女神）。ナイル川東岸は生者の領域であり、西岸は死者の領域であったが、それとは別に、ナイル川沿岸の肥沃な耕地ケメト（黒土）とその周辺に広がる不毛の砂漠デシェレト（赤土）という二項対立もあった。世界は秩序と混沌がせめぎ合う場所で、秩序が混沌に勝利することでこの世は保たれるとも考えられていた。

この二元論的思考は、古代エジプト人の宗教生活にも反映され、神々の世界は男神と女神による配偶関係が基盤となっていた。アマウネトやラート、ナウネト、ハウヘト、カウケトなどは、明かに男神（順に、アメン、ラー、ヌン、ヘフ、ケク）の名前の女性形であり、創世神話以外には殆ど登場しない。元々独立して存在していた女神が男神の配偶神に選ばれたというより、語呂合わせによって新たに作り出された感のある女神たちである。また、女神自身の属性にもこの二元性が見てとれる。主要な女神の多くは、攻撃性、残虐性、戦闘性が強調される一方で、母性溢れる存在で、王母として王を慈しみ守り育てる存在であることも前面に打ち出されている。一見すると二律背反的なこの属性には、古代エジプト人の価値観や世界観が投影されており、「母」が愛する者を守るために持つ強さが「攻」と「守」という形をとって、二元的に表されているのかもしれない（田澤 2015）。

### 4.2 動物とのかかわり

#### (1) 図像的特徴と聖獣

古代エジプトの神々の姿には、①人間、②半人半獣、③動物そのもの、の三通りの描かれ方があった。各神と結びつけられた動物は聖獣と呼ばれ、知恵の神トトのようにヒヒとトキの二種類の動物が割り当てられた例はあるものの、通常は、アヌビスとジャッカル、クヌムとヒツジ、セクメトとライオン、タウエレットと雌カバ、バステトとネコ、ホルスとハヤブサ、ハトホルと雌ウシのように、神と聖獣は一对一の組み合わせとなる。この結びつきについては、各動

物が持つ特性を崇める気持ちに基づいていると考えられる。古代エジプトでは、統一王朝成立以前から動物の姿を模した護符が製作されてきたが、これらは、その動物が持つ生存競争に有利な身体的特徴（強い、足が速い、多産であるなど）に対する畏敬の念と、その護符を身につけることで自らもそのような能力を有したいという願いの表れと考えられている（Andrews 1994）。従って、それらの動物が畏れ敬われる存在としての神と結び付けられるのは不思議なことではなく、それぞれの動物が備える特徴が各神の属性とされているのも当然のことと言えよう。

神々のこの三種類の図像表現については、以前『動物の姿→半人半獣→人間の姿』という順番で進化した」と主張されたが、この三種類の図像表現に神の呪物（神の霊力が宿るとされた物で、これを神の代わりに崇拝することで神を崇拝することの代わりになるとされる物）への崇拝という形態も加えた上で、最近の研究では、神の図像表現は人間の姿を最上位とするヒエラルキーを成立させる進化の結果ではなく、製作者が製作時に各々の条件下で行う選択の結果であるとの考え方が提唱されている（Quirke 2015）。

## (2) 動物信仰：聖牛信仰と動物埋葬

古代エジプトの宗教現象の一つに、動物信仰が挙げられる。聖獣となった動物自身が信仰の対象になったとしても不思議はないが、特に言及すべきは聖牛信仰と動物埋葬である。

聖牛信仰とは、メンフィスに信仰の中心地を持ち、プタハ神の使者とされた神聖な雄牛アピスと、太陽神ラーの使者としてヘリオポリスで信仰された聖なる雄牛ムネヴィス、そしてヘルモンティスで信仰されたメントゥ神の使者ブキスのことを指す。アピスは特殊な斑紋をもつ雄牛一頭のみが常に選ばれ、それが死ぬと盛大な葬儀が執り行われ、サッカラの地下墓地に埋葬された。遅くともアメンヘテプ3世の時代（紀元前1400年以降）には埋葬の習慣が始まっていたとされており、後述する聖獣の集団埋葬に影響を与えたと考えられている（Quirke 2015）。ムネヴィスとブキスも同様に、常に一頭だけがムネヴィス、ブキスとされ、それぞれその死に際して、条件の合う後継の雄牛が選ばれていた。

一方、紀元前700年頃を境として、ある特定の動物や鳥たちのミイラが大量に集団埋葬されるようになった。動物埋葬自体は統一王朝成立以前（紀元前3200年頃）から見られることである（例えば、ヒエラコンポリス：Quirke 2015）が、ミイラ加工を施し、それらのために地下墓地や神殿を準備するというのは、それとは異なる次元の話であろう。また、レントゲン調査の結果、多くが首を捻じられた状態でミイラ化された若いネコの存在が確認された。明らかに、儀礼もしくは祭祀のためのものであろう（Quirke 2015）。これら動物や鳥のミイラは、今日世界各地の博物館で展示されているが、この宗教行為については、それに至った歴史も社会状況もよくわかっていないのが現状である。集団埋葬の代表的な種は、ヒヒヤトキ（トト神の聖獣）、ハヤブサ（ホルス神の聖獣）、ネコ（「ラーの眼」としてのバステトの聖獣）など太陽神と関係のある神々の聖獣であることから、太陽がもたらす日々の創造と再生を象徴する動物たちが選ばれた可能性が示唆されている（Quirke 2015）。

以上のように、古代エジプトの神々は、動物たちと非常に密接な関係を築いていたのである。

#### 4.3 実用主義と互恵的貢納関係

互恵的貢納関係 (reciprocal tributary relationship) とは互いに恵み (貢物) を与え合う関係を言い、ある意味「持ちつ持たれつ」の関係とも言える。古代エジプト人と神々の間には、そのような「エネルギーの流れ」とも呼ばれる関係が存在することがこれまでに指摘されてきた (Trigger 1993; Tazawa 2009)。古代エジプト人たちは、パン、ビール、肉、織物、アラバスターなどの供物、日々繰り返す儀礼<sup>8</sup>、奉納碑の製作、神殿や社の建設などをおこなって神々が必要とするものを与え (貢ぎ)、その一方で、神々は人間たちに五穀豊穡、家内安全、戦勝、安産、無病息災などの恩恵を与える。古代エジプト人たちは神々とそのような関係を築いたのである。決して、盲目的に神に尽くす (奉仕する) だけの関係ではなかったのである。これは、一見、特別なことではないように思えるかもしれないが、メソポタミアの人々と神々の関係は、『アトラム・ハシース』に見られるように、人間がひたすら神の僕として仕え、神々の機嫌を損ねないように気を配る関係であったことを考えれば、古代エジプト人と神々の関係は、決してどの古代文明でも見られる普遍的な性格のものだったわけではないのである。

そして、そのような点で古代エジプト人の神々への態度は実用的なものであった。古代エジプト人は、限られた人間 (=王家及び神官などのエリート) のみの宗教行為<sup>9</sup>ではあったが、神との直接の接触 (儀礼) を重視し (Assmann 2014)、それは、国家秩序 (=この世の秩序) の継続、平穏な日々の生活、そして死後の安寧と復活・再生への願いを込めた実用的な行為であった。アスマンは「宗教の三つの相もしくは次元」として「儀礼」「教典」「生活規範」を設定し、古代エジプトは「儀礼」が宗教行動の中心であったとする (Assmann 2014) が、神々に捧げられた讃歌 (注3及び4.5 習合を参照) からは、アスマン自身も述べているように、古代エジプト人が神学的な思索を全くおこなっていなかったわけでないことは明らかである。「生活規範」については、ユダヤ教やイスラームがその宗教活動の中心に据えたものとしているが、確かに古代エジプト人については、宗教的理由でそれほどまでに強い生活規範を有していたことは確認されていない。時期的に儀礼の場での禁忌はあったにせよ、それは、王家と非

---

8 神殿の内陣に鎮座する神像は、神官によって日々2回ずつ浄められ、聖油を塗布され、新しい着物を着、食べ物を供えられた。今日まで残る史料の一つ (Pap. Berlin 3055) には、カルナクのアメン神殿における66の儀礼内容が記されている。また第19王朝の王セティ1世がアビュドスに遺した神殿には、それら以外の項目も含まれている。

9 王家や神官などのエリートではない一般の人々も、神殿の前庭や外側で礼拝をし、捧げものをすることは許されていた。また、特定の祭日に開催される祝祭の際には、神輿に乗って移動する神像にも近づくことができ、日常の人間関係や商取引、離婚の是非や裁判、訴訟に関してご神託を仰ぐなど神との「個人的な直接接触」を図ることができた。

王家を問わずに通年の日常生活にまで影響が及ぶほどではなかったと思われる。但し、オシリス神話においてオシリスの陰部を食べてしまったために忌み嫌われるようになったとされるオクシュリンコスのような禁忌はあったようである（プルタルコス 1996）。

#### 4.4 死者と神

古代エジプトでは、人は死後も来世での復活・再生を果たし、現世の人々に影響を及ぼすと考えられていた。ある種の神として、崇拝すべき存在、願をかける存在だったのである。そのため、貴族など中流以上の人々は、誰かが亡くなると丁寧に葬儀をおこない供養したことが墓の壁画や浮彫などからわかっている。そこには「泣き女」と呼ばれる職業哀悼者も含まれることがあり、盛大な葬儀が神となる故人への「お供え」の一つであったと思われる。

デル・エル＝メディーナの住居内部には壁龕が複数設けられており、各自の礼拝対象となった神の像や石碑が安置されていたと思われる。この中には、いわゆる「ご先祖様」となった死者の胸像も含まれていた。最近亡くなった家族であれば誰が誰だか判別できるであろうが、世代交代が進むにつれて死者は「ご先祖様」で括られるようになる。これは、我々日本人には馴染みのある感覚ではないだろうか。この「祖霊胸像」は壁龕に置かれていたであろうものの他に、お守りのように持ち歩かれたと思われるような小さな例もある（内田 2015）ことから、死者は生者と深くかかわり、遺してきた家族や子孫を見守る存在と考えられていたのであろう。

また、これらの壁龕には「アク・イケル・エン・ラー」という称号を持つ死者の姿を描いた石碑も収められていた。「アク・イケル・エン・ラー」とは「太陽神ラーの優れたアク」を意味し、かなり影響力の強い存在であることがわかる。碑上では、通常神々への奉納碑に確認されるような供物がこの称号を持つ図像に捧げられており、称号と相俟って、この人物が復活・再生を果たす太陽神の力を携えていることがわかる。この称号を持つ像が、他の神々と並んでいたり、その神々に礼拝する姿をとっていることから、遺族や子孫の願いを神々に届ける「仲介者」としても機能していたことが窺える（内田 2015）。

古代エジプト人が、神となった死者と互恵的貢納関係を築いていたことを窺わせるもう一つの例が「死者への手紙」である。亡き配偶者や家族に向けて遺族が書いたこの「手紙」は、古王国時代末期から 1000 年以上もの間書かれ続けた。内容としては、困ったことが起こった時に、それを何とか解決して欲しいという願いが込められていた。最初に、自分と死者の絆を確かめ合い、来世での安否を尋ねたあと、どんなにお願いをしても何故自分の願いを聞き届けてくれないのか、といった抗議の文言へと移る。おそらくは、既に何度か陳情したものの、一向に願いを叶えてくれない故人に対し、しびれを切らした後の行動なのであろう（内田 2015）。当該故人に対して、自分が如何にこれまで供養を怠らず、敬意を払ってきたかを訴え、それなのに自分を助けないとは如何なることか、このまま助けがなければ自分たちは滅びるので、貴方への供養の永続は難しい、という脅迫めいた文言も記されていた（内田 2015）。

#### 4.5 習合

古代エジプトが、現象としては多神教世界であったことはよく知られている。それは、個別の神同士が習合によって新たに独立神の存在を生み出すことで、数が更に増したことも影響しているであろう。古代エジプトの習合は、敵対する地域の神々を単に結合するというような中庸を得るための「融和策」の類ではなく、逆に属性が似ている神々が結びつけられたり、一柱の神の異なる側面（後述参照）、つまり位格が結びつけられたりしていると考えられている。また、古代エジプトの習合では、片方が片方をほぼ完全に近い形で「吸収」してしまった結果、「吸収」された方が表舞台から姿を消したような恰好になるケース（例：オシリスとアンジェティ）と、習合後に新しく生まれた神だけではなく習合前のそれぞれの神が残って共存するケース、全く新しい神が誕生するというよりは、習合した神々が「協力し合う」かのような存在形態になるケースがある。後者には、例えば「このオシリスは、ラーとして昇る」（Coffin Texts, I, 191g-192a; Faulkner 2004）などのように両者を同一者として置き換えて表現する場合や、「ラー・アトウム」や「ラー・ホルアクティ」などのように、神の名前を並べて記すことで両者が「AでありB」という同一の存在であることを示す場合がある。

これらは全て「一なる神」の異なる側面であって、突き詰めれば一柱の神であるとの議論（上記、研究史の項参照）にも通じることであるが、古代エジプトの習合は、単なる神々の結合、新しい神の誕生とは言えず、古代エジプト人の神観念を考える上で重要な要素となる。例えば、新王国時代第19王朝ラメセス2世治世下で編まれた讃歌（Pap. Leiden I 350）には、「すべての神は三（柱）、アメン、ラー、プタハにして、かれらに比肩しうるものなし。その名はアメンとして隠され、その顔はラー、その身体はプタハなり。＜中略＞ただかれのみ。アメンとラーと〔プタハと〕計三（柱）のみ。」（杉他1978）とあるが、ここでは三柱の神が代名詞で言及される際に、複数形と単数形の両方が使われている。また、ラメセス2世王妃であるネフェルタリの墓には、「オシリスの中に憩うのはラーであり、オシリスはラーの中に憩う。」と記されているが、ここからは二柱の神が「溶け合って」新しい一つの神になるのではなく、共に自らの属性を保ったままであることが窺い知れる。

#### 5 異郷の神々の存在：比較と翻訳

以上、古代エジプト人と神々の関わり合い方について概観してきたが、ここでは、異郷の地からエジプトに導入された神々に対してはどうであったかをみることにする。

古代エジプトへは周辺諸国から幾柱かの神が入ってきた。古王国時代にはヌビアから入ってきたと思われるデドウェンの存在が確認されており、ピラミッドテキスト（Pyramid Texts 480, 572; Faulkner 1969）では、死せる王が「デドウェン、ヌビアを支配する者」としてこの神と同一視されている。また、この神はヌビアを象徴するだけでなく、ヌビアの資源、特に香料も象徴する存在だったようで「神々に香料を供する存在」とされ、王の誕生に際して香を

焚くとも言われた (Pyramid Texts 437, 483; Faulkner 1969)。新王国時代第 18 王朝のトトメス 3 世がヌビアのエル＝レスィーヤやウロナルティに建立した神殿にも、このデドウェンが祀られている。

その他、異郷起源を示唆される神はいるが、古代エジプト史において最もインパクトの強い異郷の神々は新王国時代に王家から非王家にいたるまで幅広く崇拝されたシリア・パレスティナ起源の六柱の神々、バアル、レシェフ、ハウロン、アナト、アシュタルテ、ケデシェトであろう。前半三柱が男神、後半三柱が女神である。これらの神々は第 18 王朝前半以降の資料から確認されるので、おそらくは中王国時代末（紀元前 17 世紀半ば）から新王国時代前半（紀元前 16 世紀後半）にかけてエジプトに導入されたものと思われ、後にヒクソスと呼ばれる権力者層を形成したシリア・パレスティナ地域出身の人々が持ち込んだり、トトメス 3 世の 17 回にわたる軍事遠征の際に持ち込まれたりしたと考えられる。

具体的には、シリア・パレスティナとエジプトは、この時代以前から支配者レベルでも民間レベルでも交流しており、レバノン杉をめぐる交易や、職人集団の往来、移民などによって互いの文化に接触する機会があった。そこで、一つの支配域（ヒクソス支配域）を形成できるほどにシリア・パレスティナ出身の人々がエジプト（特にデルタ）に集まったことで、彼らと共に持ち込まれた神々も周囲に広がっていったのである。そして、このヒクソスの存在がエジプト人にシリア・パレスティナに対する見方を改めさせ、この地域を自分たちの支配下に置くことを意識させた。そのため、ヒクソスの支配から脱した第 18 王朝の王たちは、この地域に対して軍事遠征を繰り返すようになり、結果「帝国」と呼ばれる支配域を確立したのであるが、では何故それがエジプト側からの異郷の神々の導入や信仰の更なる促進につながったのだろうか？

ここに、古代エジプトの神々が「遍在神」と「地方神」に分けられるという古代エジプト宗教のもう一つの特色が関係してくる。「遍在神」とはエジプト全土で信仰が見られる神々で、イシス女神<sup>10</sup> やアヌビス神などが挙げられる。これに対して、ある特定の土地との強い結びつきを有しているのが「地方神」で、その地で人々と互恵的貢納関係を築いている。シリア・パレスティナ起源の神々の導入については、この「地方神」との互恵的貢納関係があてはまると考えられるのである (Tazawa 2009)。シリア・パレスティナでの戦勝や支配権の確立と永続を保障してもらうためには、その地の神々に供物を捧げ、奉納碑を納め、儀礼を執り行う必要性があったのである。王家による異郷の神々の導入と信仰には、このような論理が働いたと考えられる。また、ヘルク (Helck 1971) が提唱する「package deal」も可能性があるだろうか。

---

10 オシリス神話で有名なイシスはエジプトを代表する女神のような印象だが、その出自はよくわかっていない。ピラミッドテキストからは、古王国時代に既にイシスがかなり重要な位置を占めていたことが明らかであるが、彼女の存在が頻繁に確認されるのは後代になってからである。現在エジプト観光の目玉の一つになっているフィラエ島のイシス神殿も、ギリシア・ローマ時代の建立である。

当時、ヒクソスがもたらしたとされる戦車と馬については、エジプトの土着の神々の中には結びつく神がいなかったため、当該地域から導入された神々（レシェフとアシュタルテ）があてがわれたという見方である。そして、非王家・非支配層レベルにおいても、戦利品として連行された人々や自発的にエジプトに移ってきた人々によってシリア・パレスティナの神々が持ち込まれ、その信仰が広まったのである。

では、これらの六柱の神々はどのように崇拝されたのであろうか。彼らの信仰形態については、エジプト土着の神々同様、文字資料と図像資料の双方から探ることができる。文字資料は建造物やパピルス、石碑、彫像、レリーフ、石製容器、オストラカに遺されており、図像は同様に建築意匠、石碑、彫像、レリーフ、オストラカ、護符に確認できる。これらの資料から、以下にバアル、レシェフ、ハウロン、アナト、アシュタルテ、ケデシエトの順に、異郷の六柱の神々のエジプトでの存在形態について読み解いていく（Tazawa 2009）。

バアルについては、同神に仕える神官や宗教施設が存在し、その名前が王家の軍隊名や川の名前に採用されていたことがわかる。また「バアルの如く」というフレーズは、王の強さ、偉大さ、勇敢さを象徴するエピセツトとして使われた。両手を脇に下ろして立ち、ウァス杖とアンクシンボルを手にしている姿で描かれることが多いが（図2）、これは古代エジプトの神々によく見られる表現方法である。古代エジプトの白冠を思わせる円錐形の冠には頂部からリボンが下がっており、腰布にはタッセルが施されているが、これは西アジア的要素であり、以上からエジプト的要素と西アジア的要素が共に用いられていたことがわかる。シリア・パレスティナでのバアルの属性は「豊穡神」「天候神」であったが、エジプトではそれが継承された様子を確認できないことは興味深い。この属性を保っているのであれば、エジプトにおいてはオシリス神やミン神との同一視が考えられるが、実際にはセト神との同一視が確認された。第19王朝の王たちは自分たちの出自の正統性を主張するためにセト神を王朝神に据えて信仰した（国家神はアメン・ラー）が、王のあるべき姿のエピセツトに用いられたバアルは、従ってセトと同一視されたのである。故に、銘文でセトと呼ばれている神は、上述したようなバアルの姿で描かれたのである。

レシェフについては、「偉大な神」「天の主人」「永遠の主人」などエジプト土着の神々に普遍

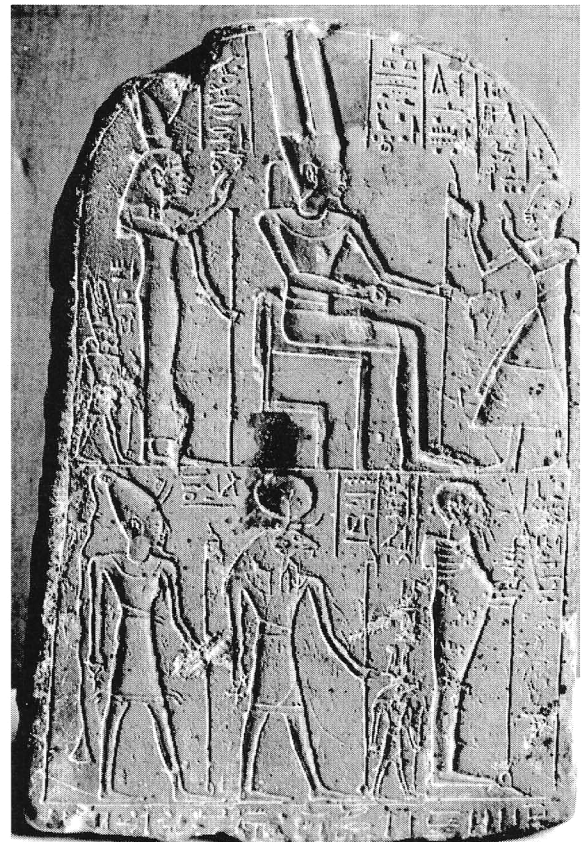


図2：エジプトでのバアル神（下段左端）  
（© Tazawa 2009）



的なエピセツトの他、プタハとの同一視を思わせるエピセツト「祈りを聞く者」が与えられていた。また、レシェフ特有のものとしては「馬と馬小屋の主人」「脊髄/骨髄の主人」というエピセツトがある。そして、その姿は四通りの方法で描かれた。一つ目は所謂「smiting posture」と呼ばれるポーズであり、片手で武器を振りかざし、もう一方の手に盾を持って前にかざしているもの（図3-1）で、これには立位と座位がある。二つ目は、両手を脇に下ろして武器や盾を持つ姿であり、三つ目はその手にするものがウァス杖とアネクシムボルに替わる。そして四つ目が、後述するように、同じくシリア・パレスティナ起源の女神ケデシエト及びエジプト土着の神（主にミン神）と共に三柱で描かれるものである（図3-2）。総じて、レシェフは豊穡や死後の安寧を叶える存在、救済者としてシリア・パレスティナでの属性を引き継いでいるとみられるが、エジプトで特徴的なのは、やはり馬や戦車との結びつきであろう。王家の馬小屋の馬たちの世話を任されたアメンヘテプ2世が、それをきちんと遂行したことでレシェフとアシュタルテが喜んだとの銘文もある（Tazawa 2009）。

ハウロンは、ギザに建てられた奉納碑によれば、神殿を持っていたようである（Tazawa 2009）。人間の姿で表されることもあるものの、ハヤブサ姿もしくはスフィンクス姿で描かれることが多く、六柱の神々の中で、動物の姿そのもの、もしくはエジプトの既存の神と同じ姿（スフィンクス=ホルエムアケト）で表される唯一の神である。二重冠を被っていることから、ホルス神との強い結びつきは間違いない（図4-1；4-2）。バアルやレシェフと同様に「偉大な



図3-1：エジプトでのレシェフ神  
© Tazawa 2009



図3-2：エジプトでのレシェフ神（上段右端）  
© Tazawa 2009

神「天の主人」「永遠の主人」といったエジプト土着の神々と共通のエピセツを持つ他に、「ハウロンーホルエムアケト」のエピセツにも象徴されるように、ホルス、ラー、アトゥムなど太陽神と同一視されていたことがわかる。これは、もう一つの図像表現であるスフィンクス姿とも通じていて、エジプトの大神との同一視は他の五神との大きな違いを見せており注目に値する。ウガリット神話では黒魔術の神とされており、病気やケガ、蛇毒などはハウロンが生み出したものと言われていたことと比べると、大きな違いである。

アナトは、第19王朝のラメセス2世治世下で信仰のピークを迎え、同王の寵愛を受けた女神で、王の私的信仰の最も良い例と言える。シリア・パレスティナ地域では、ラメセス朝（第19・20王朝）の王朝神であるセトと同一視されたバアルの配偶神（『バアルとアナト』）であり、その関係性がエジプトでも反映されたと考えられる。そのため、アナトは「王の母」「アナトの乳を飲みしラメセス2世」など王の神母として言及されることが多く、またラメセス2世は自分の子供たちや愛犬に「ピントアナト（アナトの娘）」「マヒルアナト（アナトの乳を飲む者）」「アナトエムナケト（アナトは強し）」など、アナトの神名を戴く名前をつけた。一方、「天の女主人」「全ての神々の女主人」などのエピセツはエジプト土着の多くの女神たちに共通するものである。注目に値するのは「ラーの娘」「プタハの娘」というエピセツで、これらは後述するようにアシュタルテと共通のエピセツであり、「ラーの眼」「プタハに愛されし者」というエピセツを持つケデシェトともラーやプタハを通して関連付けられ、更には、エジプトの大女神であるハトホル、イシス、セクメト、バステト、ムトと関連付けられるのである。アナトの図像的な描かれた方としては、ラメセス2世の神母として同王の横に座り、王の肩に手を置いている（神的保護を与えている）姿が知られているが、その他にも座位、もしくは立位で武器を振りかざしている姿で描かれている。アナトはシリア・パレスティナでは戦闘女神として描かれることが多く（『バアルとアナト』『アクハト物語』）、エジプトでもその属性がそのまま取り入れられたと考えられ、「戦士のようにふるまう女性」「男として衣をまとい、女として戦いに備える」というエピセツにそれが表れている。



図4-1：エジプトでのハウロン神（ハヤブサ姿）  
© Tazawa 2009



図4-2：エジプトでのハウロン神（スフィンクス姿）  
© Tazawa 2009

興味深いのは、上下二段の二場面に分かれた奉納碑において、下段には椅子に座って武器を振りかざしているアナトの姿が彫り込まれており、上段には、レシエフのところでも触れたようなケデシエト女神の三柱神が彫り込まれていることである（図5）。この他、アナトはアシュタルテと共に、治癒女神として呪術文書にも登場するが、戦闘女神としての力強さ、獰猛さとそれらを用いて治癒や保護を図る守護女神としての属性が、上述した二元性を反映し逆説的に表裏一体となった結果と考えられる。

アシュタルテは、アナトと同じように「天の女主人」「全ての神々の女主人」というエジプト土着の女神と同じエピセツを与えられた他、エジプト王妃のエピセツ「二国の女主人」も与えられた。そして、これもアナト同様、ラメセス2世の子供の名前「メリアシュタルテ（アシュタルテに愛されし者）」にも用いられている。彼女はエジプトにおいて、レシエフと並んで馬や戦車と結びつけられ、その姿の多くは騎馬姿で、盾を持ち、槍を振りかざすのが一般的であった（図6）。また、第19王朝のセティ1世が自らを「メンチュウ（戦闘神）とアシュタルテに愛されし者」と称し、第20王朝のラメセス3世がアシュタルテとアナトを彼の「盾」となぞらえたことから、アシュタルテが戦闘女神であったことは明らかである。「プタハ神の娘」のエピセツに加え、「ペル＝ネフェルの女主人」というエピセツは、アシュタルテとメンフィスの強い結びつきを表している。デルタのピラメセスにはアシュタルテ神殿が存在していたことを示す文書もあり（pAnastasi II; pAnastasi IV）、下エジプトでのアシュタルテ信仰がある程度の規模であったことがうかがえる。

ケデシエトは、シリア・パレスティナでは独立した女神ではなかった。セム語で「神聖な」「聖なる」を意味し、アシェラ女神のエピセツであった「*qds*」から派生した神名であることは間違いないであろう。六柱の神々の中で、唯一王家とのかかわりが確認されておらず、出土地不明のものを除けば、資料はメンフィスとデル・エル＝メディーナに集中している。属性については、上述のような理由で出自地でのそれとの比較は難しいのであるが、エジプトでは、アナトやアシュタルテと共有した「天の女主人」「全ての神々の女主人」「二国の女主人」のエピセツの他、「ラーの眼」というエピセツが、ケデシエトを

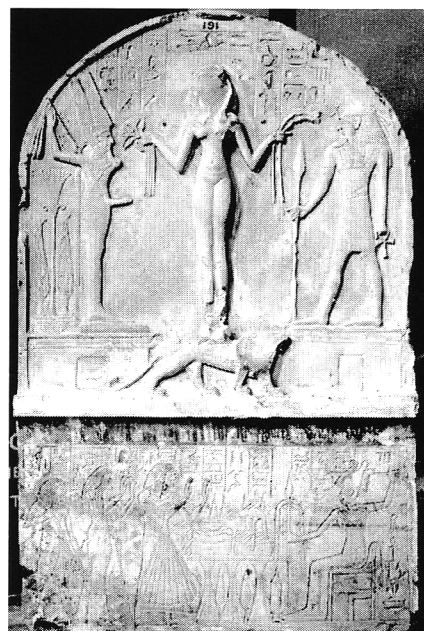


図5：エジプトでのアナト女神（下段右端）  
（© Tazawa 2009）

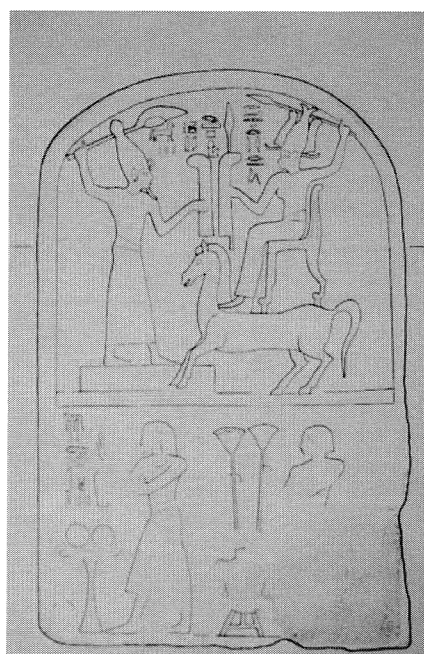


図6：エジプトでのアシュタルテ女神（上段右端）  
（© Tazawa 2009）

エジプトの大女神イシス、ハトホル、セクメト、バステト、ムト、そしてテフヌトやアヌキスなどとも結びつけた。その他、「魔術偉大なる者」はケデシェトとイシスを結びつけるもう一つのエピセットである。図像表現に関しては、ケデシェトは、シリア・パレスティナ起源の六柱の神々のうち、最も特徴的な描かれ方をした神かもしれない。「ケデシェトスタイル」と呼ばれるその姿は、裸で手にヘビやロータスを握り、正面向きに立つ姿が基本で、ライオンの背の上、もしくは地面に直接立つ形をとる。頭にはハトホル鬘を被り、三日月と日輪、もしくはハトホルシストラム、アバカスなどの装飾物を載せている。そして、単独で描かれる場合(図7)と、エジプト土着神のミン(もしくはオヌリス)とレシェフと共に三柱神の様相を呈する場合がある(図3-2)。

レリーフや描画などでは人物や動物は圧倒的に横向きに描かれることが多いエジプトで、このように正面向きの裸体は珍しい。紀元前二千年紀前半にはクレタ島を含む東地中海地域でこのモチーフが広く確認されることは興味深い(田澤 2009)。その他、動物の背に乗るというモチーフも、トウトアンクアメンやセティ2世の像の例があるものの、エジプトではあまり見られないものであり、西アジア起源と考えられるべきである。その他、手にしている蛇の象徴的役割なども併せて、このケデシェトの図像表現に関しては、以前エジプトからシリア・パレスティナへ伝わった意匠が「再輸入」もしくは「再採択」された可能性のあるもの、新たにエジプトへ持ち込まれた西アジア的要素、そしてエジプトの伝統的な概念に則っている部分から成り立っていると考えられる(田澤 2009)。

以上、新王国時代のエジプトに導入されたシリア・パレスティナ起源の六柱の神々について概観したところで、古代エジプト人がこれらの神々とどう向き合ったかを考えてみたい。まずは神々の姿形であるが、シリア・パレスティナ側にはこれらの神々の元々の図像表現が確認されていない<sup>11</sup>。これまでにも指摘されていることではあるが、シリア・パレスティナの神々の姿は、エジプト、アナトリア、メソポタミアの影響を多分に受けている(Tazawa 2009 及びその文献表を参照のこと)。バアルやレシェフは所謂「smiting posture」で表されるが、これはエジプトでのスタイルが確立された後のことであり、エジプトでの姿が「輸出」された形なのである。このような状況下ではあるが、古代エジプト人がシリア・パレスティナ起源の六柱の神々



図7: エジプトでのケデシェト神(単身)  
(© Tazawa 2009)

11 ウガリット文書に登場するアシュタルテのように、言葉でその姿形が描写されているケースはあるものの、具体的な図像としては確認できない(Tazawa 2009)。

の姿を描く際には、基本的には土着の神々を描く時と同様の方法をとっていると言える。「smiting posture」は古くはナルメル王のパレットにも確認できるほどエジプトのモチーフとして長い歴史を持っているし、ケデシェトの正面向きは珍しいにしても、その他の神々は原則的に横向きのスタイルが貫かれている。腰布の先につけられたタッセルや冠の頂部から垂れ下がるリボンなど、西アジア起源の要素も見られるものの、神々はエジプト式の冠（白冠、赤冠、二重冠、アテフ冠）を被り、エジプト式の衣装（男神の腰布、女神のチュニック）を纏っている。

一方で、文字資料からも古代エジプト人の異郷の神々への向き合い方がわかる。彼らは、エジプト土着の神々に対するのと同様に、奉納碑でこれら六柱の神々に願いを訴え、王の称号や死後の賛美の中にその名を用い、神殿やパピルスに遺した銘文や書簡、呪術文書に神々の名前を記した。

このようにみえてくると、シリア・パレスティナ起源の六柱の神々が古代エジプトの伝統的な神々との関係、すなわち互恵的貢納関係を築いていたことは疑いのないことであろう。元々の土地での属性をそのまま引き継いだ例、エジプトで新しい属性を付与された例のいずれにおいても、これらの神々は礼賛され、人名に用いられ、神殿や奉納碑が建てられ、供物が捧げられた。そして、この「貢物」に対する「恩恵」として、六柱の神々は王権の安定や威厳、正統性、健康、平和、豊穡、死後の復活・再生と安寧を確約した。トリッガーが指摘した神と人間の間にある「エネルギーの流れ」(Trigger 1993) は、古代エジプト人と異郷の神々の間にも存在したのである。

そして、異郷の神々を自分たちの伝統的な神々との関係の中に取り込んだ古代エジプト人は、「翻訳的適応 (translative adaptation theory)」というプロセスを踏んでいたと考えられている (Tazawa 2009)。「翻訳的適応」とは「異郷の概念や思想、システムは、元々の形のまま導入されるのではなく、導入された場所における必要性に応じて適宜修正・変更が施されて (= 翻訳されて) 受容される」という考え方 (Tazawa 2009 の参考文献参照) で、つまり、シリア・パレスティナ起源の六柱の神々も、ウガリット神話にみられるような元々の属性や背景をそのままエジプトに持ち込んだのではなく、受け入れるエジプト人側の事情が介在して「翻訳」がなされたということである。

一つの例として、ハウロンを挙げることができる。ハウロンはスフィンクス姿で描かれることもあり、ホルエムアケト（「地平線上のホルス」の意味で、新王国時代にはギザのスフィンクスを指していた）と同一視されていたことは明らかである。この他、上述のようにラーやアトウムとも関連付けられ、現在までに確認できる資料の出土地の三分の二以上がギザであることを考えれば、ハウロンは、明らかにヘリオポリスの太陽神信仰の枠組みの中に入れられていたことが窺える。新王国時代前半、新しく国家神となったアメン神に仕える神官団の勢力が巨大化し、政治面にも関与してくるようになったことで社会の混乱を憂いた王たちは、同神官団の力を弱め、バランスを取るための拮抗勢力として太陽神信仰の盛り返しを図った。ホルエムアケトは、ケプリ、ラー、アトウムとも結びつけられ、太陽神として最強の布陣を貼ったが、そのホルエムアケトと同一視されたのがハウロンであった。当時の宗教事情、政治事情を反映した同一視だったのである。

もう一つの例は、アナト・アシュタルテ・ケデシエト三女神である。デル・エル＝メディーナ出土の石碑断片には、ライオンの背に立ったケデシエトスタイルの女性像が一体刻まれているが、その周囲の銘文からはこの像に対し、ケデシエトの他、アナトとアシュタルテが呼びかけられていることがわかる（図8）。アナトとアシュタルテは、ウガリット神話においてもエジプト神話においても非常に明確に関連付けられており、属性の幾つかを共有しているが、ケデシエトにおいてはエジプトで姿を与えられた女神である。では、この三女神が揃っていることは何を表しているのだろうか。ここで三女神に与えられた属性を確認することで、三女神が一つのグループになってハトホル女神の属性を映し出していることがわかる（Tazawa 2009）。どれか一柱の女神のみがハトホルと同一視されたのではなく、ハトホルが持つ戦闘女神としての側面（＝セクメト）をアナトとアシュタルテが、王の神母としての側面（＝イシスとムト）をアナトが、豊饒女神としての側面をケデシエトがそれぞれ担っているのである。ケデシエトの豊饒女神としての属性は、何よりも正面向きの裸の姿に認められている。この場合の豊饒とは、単なる五穀豊穡の意味ではなく、生殖活動を含む全ての動植物の豊かな実りを意味する。古代において裸は今日的なポルノグラフィではなく、生存と生き残りをかけた各生命体の命の継続に結びついていたのである（Meskell 2002; Tazawa 2009）。そして、更なる検証の結果、これはハトホルを中心とした機能の反射ではなく、「母なるもの（motherhood）」としての各側面を持ち合わせていたエジプトの女神たち（ハトホル、イシス、ムト、セクメト、バステト）とシリア・パレスティナ出身の三女神（アナト・アシュタルテ・ケデシエト）が、それぞれ個別に結びついて一つの「母なるものダイアグラム」を構築した形になっていることが提唱された（Tazawa 2014）。

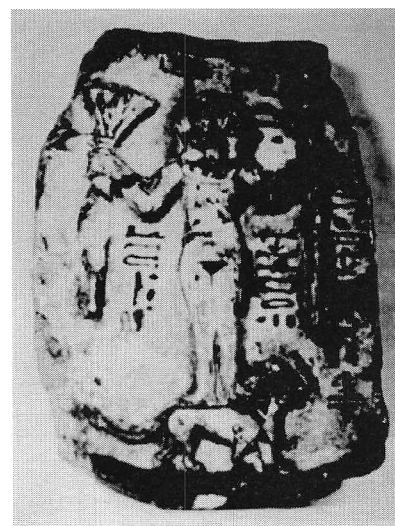


図8：ネフェルホテプのステラ断片  
(© Tazawa 2009)

## 6 古代エジプトの神々の遺産

ここでは、現代の我々が日々の生活の中で見たり、聞いたりするものの中に隠れ見える古代エジプトの神々の姿について考える。

### 6.1 聖母子像

紀元前一千年紀に入ると、オシリス神話に基づいて、座したイシスが息子ホルスに授乳する姿をモチーフにした護符や像(図9)が盛んに作られるようになった。ホルスは王の化身なので、神母イシスが王に乳を与える場面の象徴でもある。既に、ピラミッドテキストにイシスが王に授乳すると記されている（Pyramid Texts 734 他）が、図像表現上、紀元前二千年紀においては、



子供姿の王に乳を与えるのはイシスではなく雌牛姿のハトホル女神(図 10)の方が有名である。ハトホルとはエジプト語で「ホルスの家」を意味し、文字通り王を守護する者を表すが、新王国時代以降、ハトホルとイシスの同一視が進むに連れて、ハトホルの図像アイテムであった雌牛の角とその間に輝く日輪はイシスの図像モチーフにもなった。そして、紀元前一千年紀にはホルスに授乳するのはハトホルではなく、イシスになったのである。

同じ頃、イシスは航海の女神としての属性も加わって東地中海地域にその信仰を広げていき、ギリシア・ローマ時代に至ってはフィラエ島に神殿も建立された。また、アテナイをはじめとするギリシア諸都市、そしてその後はローマ市だけでなくローマ帝国内の多くの地域に、この女神に捧げられた神殿が建設された。この時代のイシスは、手に錨と子供の神もしくは角を持つ姿でも表されている。プルタルコスによってオシリス神話(プルタルコス 1996)がまとめられたのも、この時代に相当する。このようなイシス信仰拡大の波に乗って、ホルスに授乳するイシスの姿もローマ帝国内に浸透し、やがて国教となったキリスト教の聖母子像へとつながったと考えられている。

## 6.2 アマルナ宗教改革と一神教の問題

新王国時代紀元前 14 世紀にアクエンアテンが進めたアマルナ宗教改革が、後のユダヤ教、キリスト教、イスラームという一神教の先駆けであるかどうか、影響を及ぼしたかどうか、ということについては、古代エジプトに一神教概念は存在したのかという問題を含めて、長年にわたって議論されてきた。そして、それは今も現在進行形である。



図 9：子供のホルスを抱くイシス女神  
(© 古代オリエント博物館; AOM339)

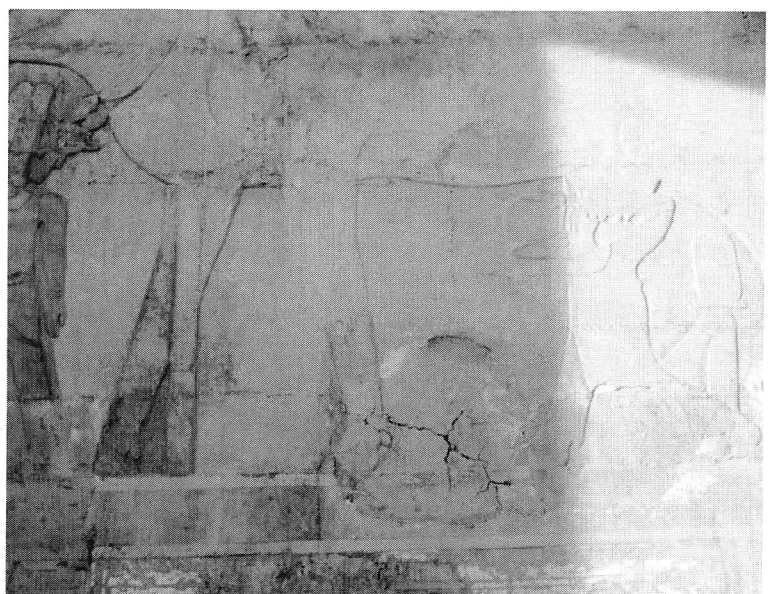


図 10：ハトシェプストに授乳する雌牛姿のハトホル女神  
(© Tazawa)

20世紀前半から中盤にかけては、古代エジプトの宗教は一見したところ八百万の神々が存在している多神教世界だが、実はその背後にそれらを超越する一柱の神がおり、エジプト語で「神」を意味するネチュルが特定の神を表すのではなく、まさにただ唯一の神、上位にある一柱の神を指しているとする可能性も含め、古代エジプト人たちは一神教的な思想を保持していたとする見解があった (Morenz 1960/1973)。これに対し、20世紀後半には「『神 (ネチュル)』とは唯一の神、至上の神とは真逆の立場であり、『特定の神ではない』ということは『至上の神である』ということではなく、『神』は、より曖昧でどんな神としてでもあり得た融通無碍な存在である」との見方が提示された (Hornung 1971/1982)。日本文化の中で生まれ育った人間には、これは理屈ではなく感覚として納得できるものがあるのではないだろうか。特定の信仰を持っている場合は、「神」と口にする際に特定の崇拝対象を心に抱いているのであろうが、そうでない場合は、非常に曖昧な姿の「神」を心に描いていると思われる。それは「ご先祖様」の名の下にグループ化された祖先たちかもしれないし、超自然的な畏れを抱かせる存在かもしれないし、なんとなく人知の及ぶところではない漠然としたものでもあるだろう。こう考えると、習合現象も「A神がB神の中に憩う」という表現も、唯一の神に向かっての一神教的な動きとは言えないことになり、数多の神々の中から一柱を選んで崇拝するという行為は、どちらかと言えば、単一神教 (自己の宗教の中で他の神々の存在も認め、パンテオンの中の一柱の神を主神としてその他の神を従属神とするもの) に近いという指摘 (Wilkinson 2003) にもうなづける。こうしてアクエンアテンの宗教改革は、多数の神々から「アテン」という一柱の神を選んで声高にその支持を主張した例であるという解釈が提示されたのである (Hornung 1971/1982; Wilkinson 2003)。

以上のように、アクエンアテンの宗教改革に対しては、元々エジプト人の中に備わっていた一神教的思考が表面化したという見方と、反対に、そのような先例や宗教基盤がない中で数々いる神の中から一柱を選び出して急進的にその信仰を進めた、という二通りの見解がまとめられた (Allen 1999)。つまり、アマルナ宗教改革の検証をきっかけとして、エジプト宗教の根本部分をめぐる議論が展開されたのである。

では、アテン信仰自体を一神教と定義すること自体はどうであろうか？ここでは、二つの面から考える必要があると思われる。教義自体とそれを具象化する「信者」と聖職者集団からなる宗教的社会組織の有無である。アテン讃歌によれば、アテンは全ての国土をつくり、それを囲み、その涯まで達して愛する息子 (アクエンアテン) のためにそれらを征服する存在であり、アテンのおかげで動物も植物も生きとし生けるものは全て活力を得て、皆、アテンのその偉大さを賞賛する。アテンは思いのまま世界を創造し、人、家畜、野獣、地上を歩くもの、空を飛ぶもの、全てをつくった存在とされ、エジプトとその周辺地域に必要なものを与える慈悲深い神であった (杉他 1978)。これらの言述は、アテンが万物の創造主であり、世界の支配者であることを訴え、また神話的な要素も暗示されずに明快なアテン賛美を展開している。アスマンの言うように、「新太陽神学」という一柱の神を据えた新教義 (新宗教) がアクエンアテンによって創設されたという印象を与えているだろう (Assmann 1991/1998/2001)。また、ア



クエンアテンの諸行為（二回目の改名でシュウとホルスの名前が欠落、アメン他の神々の名前削除、神の複数形（ネチェルウ）が多くの墓や石碑やオベリスク、神殿から削除）は、一神教的な態度ではある。同じくアスマンが一神教の目印とする「排他性」（Assmann 1997/2016）に正しく合致するだろう。しかしながら、同じアテン讃歌で「汝、わが心（当該碑文を残した人物）にあり。（されど）汝の子ネフェルケペルラー・ウアエンラーの他に汝を知れるものなし。汝、かれにその企て、力を精通させればなり。」（杉他 1978）と詠われているように、アテンを崇拝する者全てがアテンと直接接触できるような教義ではなかった。王が神と人々の仲介者であり、祭祀の際は王のみが神の御前に出るとするのは古代エジプトには伝統的なことであるが、上述のような排他性を考慮すれば、それまでとは状況が異なるのは明らかであろう。そしてそれ故に、アテン信仰の教義を遂行する聖職者集団も信徒集団も形成されなかった。つまり、一つの宗教的社会層を形成しなかったのである。以上のことから、アテン信仰は教義的には一神教的であっても、一神教としての実質的な体裁は整っていなかったと言える。

そして、アマルナ宗教改革のその後の一神教教義に対する影響については、アテン讃歌と詩篇 104 との類似の問題が早くから指摘され、アテン信仰の一神教的精神が詩篇の祖型となっているのではないと言われてきたが、旧約聖書はアテン信仰が起こった時代よりも 1000 年近く後代に編纂されたものであるため、詩篇への影響については疑わしい。一方、ヤーヴェに対する絶対的な唯一神論が成立したのは紀元前 6 世紀以降のバビロン捕囚期であるとされる（星野他 2010）が、モーセの十戒第一条に見られる唯一神論（モーセの一神教）については、ホフマイヤー（Hoffmeier 2015）の言う通りエジプトの一神教的な宗教観の影響を否定できないだろう。但し、これは即ちアテン信仰そのものが影響力の強い一神教であったということではない。これは、エジプト宗教の底辺に流れる「単一なるもの」と「多数のもの」のうちの「単一なるもの」のことであって、アスマンの唱える「単一神」の存在が「モーセの一神教」にインスピレーションを与えた可能性を考えるべきであろう。そして、この「単一なるもの」と「多数のもの」のバランスが崩れた（＝「多数なるもの」の存在否定）が故にアテン信仰はアクエンアテンの私的信仰のような形をとり、後継者も設置できないまま一代限りで終わったのである。

## 7 今後の展望

古代エジプトの宗教研究は、圧倒的に資料を有している欧米の研究者を中心に、キリスト教的視点からおこなわれてきたことは否めない。キリスト教揺籃の地についての研究は、キリスト教社会に暮らす人々には、自分たちの精神文化の起源を探る上で自己を知るための無意識の知的欲求であったろう。しかしながら、エジプトの宗教は当たり前ではあるがキリスト教成立以前の話であり、キリスト教的視点のみの検証では、その全容をつかむことは不可能である。そこで、エジプト学後進国の日本ではあるが、日本文化の基盤があるからこそそのエジプト宗教研究もできるはずである。例えば、祖先崇拜は我々には自然なことで、お盆には直接知ってい

る親族の霊だけでなく、何代も前の名前も知らない「ご先祖様」をお迎えするようなこともある。以前、英国留学時にデル・エル＝メディーナの祖先崇拜について授業で触れた際、日本人である筆者と韓国からの留学生には特に何の違和感もなかったのが、現地のキリスト教社会で生まれ育った友人にはとても特異なものに感じられたようである。また、上述したように、「神様」の一言が意味するものが非常に広く曖昧な日本、たった一つの国教が定められて日常生活がそれに基づく暦に準じている社会ではない日本、お正月もお盆もクリスマスもハロウィーンもある日本に住んでいる立場だからこそその視点は必ずあるわけで、今後は日本人独自の視点もきちんと持って、古代エジプトの神々を考えていく必要がある。

また、それとも関連するが、比較神話学、比較宗教学の立場からもエジプトの神々や神話を考えてみる必要があるだろう。日本神話学者松前健氏の言葉を借りるのであれば、「古代エジプトの神々の姿をもっと学際的に洗い直し、人類思想史の中の一コマとして捉え、実証的な立場からこれらを眺める」ということが必要なのではないだろうか。

\*本稿では、セミナー当日の内容に一部加筆・修正を施し、全体構成を整理した。また、セミナー当日の時間と本稿の紙幅の都合上、概略を述べるに留まった部分もあるので、文末の【参考文献 及び 古代エジプト宗教を更に知るための文献リスト】も参照されたい。

【参考文献 及び 古代エジプト宗教を更に知るための文献リスト】

Allen, T. G.

1974 *The Book of the Dead or Going Forth by Day. Ideas of the Ancient Egyptians Concerning the Hereafter as Experienced in Their Own Terms*, Chicago: The University of Chicago Press.

Allen, J. P.

1995 *Genesis in Egypt. The Philosophy of Ancient Egyptian Creation Accounts*, Texas: Van Siclen Books. (First Edition 1988)

1999 "Monotheism: The Egyptian Roots", *Archaeology Odyssey* 7:8, pp. 44-54.

Andrews, C.

1994 *Amulets of Ancient Egypt*, Texas: University of Texas Press.

Assmann, J.

1991 *Ägypten: Theologie und Frömmigkeit einer frühen Hochkultur*, 2<sup>nd</sup> ed., Stuttgart: Kohlhammer W. (英訳: D. Lorton, 2001. *The Search for God in Ancient Egypt*, Ithaca and London: Cornell University Press. 邦訳: 吹田浩訳 1998 『エジプト初期高度文明の神学と信仰心』 関西大学出版部)

1995 *Egyptian Solar Religion in the New Kingdom. Re, Amun and the Crisis of Polytheism*, London and New York: Kegan Paul International.

1997 *Moses the Egyptian: The Memory of Egypt in Western Monotheism*, Harvard: Harvard University Press. (邦訳: 安川晴基訳 2016 『エジプト人モーセ: ある記憶痕跡の解読』 藤原書店)

2005 *Death and Salvation in Ancient Egypt*, Ithaca and London: Cornell University Press.

2008 *Of God and Gods. Egypt, Israel, and the Rise of Monotheism*, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.

2014 *From Akhenaten to Moses: Ancient Egypt and Religious Change*, Cairo and New York: The American University in Cairo Press.

David, R.

1973 *Religious Ritual at Abydos (c. 1300 B.C.)*, Warminster: Aris and Phillips.

Desroches-Noblecourt, C.

2007 *Gifts from the Pharaohs. How Egyptian Civilization Shaped the Modern World*, Paris: Flammarion.

Dumézil, G.

1958 *L'idéologie tripartite des Indo-Européens*, Bruxelles: Latomus. (邦訳: 松村一男訳 1987 『神々の構造』 国文社)

Dunand, F. and C. Zivie-Coche

2004 *Gods and Men in Egypt. 3000 BCE to 395 CE*, Ithaca and London: Cornell University Press.

El-Shazly, Y.

2015 *Royal Ancestor Worship in Deir el-Medina during the New Kingdom*, Wallasey: Abercromby Press.

Faulkner, R. O.

1969 *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, Oxford: Oxford University Press.

2004 *The Ancient Egyptian Coffin Texts*, Oxford: Aris & Phillips.

Frankfort, H. et al.

1946 *The Intellectual Adventure of Ancient Man*, Chicago: Oriental Institute Publications. (邦訳：山室静・田中明訳 1978 『古代オリエントの神話と思想：哲学以前』 社会思想社)

Griffiths, J. G.

2001 "Myths-Osiris Cycle, Solar Cycle", *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. 2, pp. 472-480.

Harrington, N.

2013 *Living with the Dead. Ancestor Worship and Mortuary Ritual in Ancient Egypt*, Oxford and Oakville: Oxbow Books.

Helck, W.

1971 *Die Beziehungen Ägyptens zu Vorderasien im 3. und 2. Jahrtausend v. Chr.*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Hoffmeier, J. K.

2015 *Akhenaten and the Origins of Monotheism*, New York: Oxford University Press.

Hornung, E.

1971 *Der Eine und die Vielen: Ägyptische Gottesvorstellungen*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft. (英訳：J. Baines, 1982. *Conceptions of God in Ancient Egypt. The One and the Many*, Ithaca and New York: Cornell University Press.)

1992 *Idea into Image. Essays on Ancient Egyptian Thought*, New York: Timken Publishers.

1999 *The Ancient Egyptian Books of the Afterlife*, Ithaca and London: Cornell University Press.

2001 *Akhenaten and the Religion of Light*, Ithaca and London: Cornell University Press.

Hornung, E. and T. Abt.

2007 *The Egyptian Amduat: The Book of the Hidden Chamber*, Zurich: Living Human Heritage Publications.

2014 *The Egyptian Book of Gates*, Zurich: Living Human Heritage Publications.

Ikram, S.

2015 *Divine Creatures. Animal Mummies in Ancient Egypt*, Cairo and New York: The American University in Cairo Press.

Ions, V.

1968 *Egyptian Mythology*, London: Paul Hamlyn. (邦訳：酒井傳六訳 1988 『エジプト神話』 青土社)

Kaper, O.

2001 "Myths-Lunar Cycle", *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. 2, pp. 480-482.

Kemp, B. J.

1995 "How Religious were the Ancient Egyptians?", *Cambridge Archaeological Journal* 5-1: pp. 24-54.

Leitz, C.

2002 *Lexikon der ägyptischen Götter und Götterbezeichnungen*, vols. I-VIII, Leuven& Paris& Dudley, MA: Peeters.

Lipński, E.

2009 *Resheph. A Syro-Canaanite Deity*, Leuven& Paris& Walpole, MA: Peeters.

Luft, U.

2001 "Religion", *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. 3, pp. 139-145.

Meskel, L.

2002 *Private Life in New Kingdom Egypt*, Princeton and Oxford: Princeton University Press.

Morenz, S.

1960 *Ägyptische Religion*, Stuttgart: W. Kohlhammer GmbH. (英訳：A. E. Keep, 1973. *Egyptian Religion*, Ithaca and New York: Cornell University Press.)

1965 "Ägyptische Totenglaube im Rahmen der Struktur ägyptische Religion", *Eranos Jahrbuch* 34, pp. 399-466.

Moret, A.

1902 *Le rituel du culte divin journalier en Egypte*, Paris: E. Leroux.

Pinch, G.

2002 *Egyptian Mythology. A Guide to the Gods, Goddesses, and Traditions of Ancient Egypt*, New York: Oxford University Press.

Quirke, S.

1992 *Ancient Egyptian Religion*, London: British Museum Press.

2015 *Exploring Religion in Ancient Egypt*, West Sussex: Wiley Blackwell.

Shaw, G.

2014 *The Egyptian Myths. A Guide to the Ancient Gods and Legends*. London: Thames and Hudson.

Szpakowska, K.

2014 "Religion in Society: Pharaonic" in Lloyd, A. (ed.), *A Companion to Ancient Egypt*, West Sussex: Wiley Blackwell, pp. 507-522.

Teeter, E.

2011 *Religion and Ritual in Ancient Egypt*, New York: Cambridge University Press.

Tobin, V. A.

2001a "Mythological Texts", *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. 2, pp. 459-464.

2001b "Myths—An Overview, Creation Myths", *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, vol. 2, pp. 464-472.

Trigger, B.

1993 *Early Civilizations: Ancient Egypt in Context*, Cairo: The American University in Cairo Press. (邦訳：川西宏幸訳 2001 『初期文明の比較考古学』同成社)

Tazawa, K.

2009 *Syro-Palestinian Deities in New Kingdom Egypt: The hermeneutics of their existence*, Oxford: Archaeopress.

2014 "Astarte in New Kingdom Egypt: Reconsideration of Her Role and Functions", in Sugimoto, D. T. (ed.), *Transformation of a Goddess. Ishtar-Astarte-Aphrodite*, Fribourg and Göttingen: Academic Press and Vandenhoeck & Ruprecht, pp. 103-123.

2015 "Egyptian Divine Triad: Structure and Function –From the viewpoint of comparative religion–", *International Congress of Egyptologists XI abstract papers*, pp. 148-149.

2017 "Divine Triad in Ancient Egypt: Preliminary Comparative Studies on its Structure and Function", *Eleventh Annual International Conference on Comparative Mythology Abstracts*, pp. 45-46.

Traunecker, C.

2001 *The Gods of Egypt*, Ithaca and London: Cornell University Press.

Wilkinson, R. H.

2003 *The Complete Gods and Goddesses of Ancient Egypt*, London: Thames and Hudson

(邦訳：内田杉彦訳 2004 『古代エジプト神々大百科』 東洋書林).

井上順孝編

2014 『21 世紀の宗教研究—脳科学・進化生物学と宗教学の接点』 平凡社。

内田杉彦

2004 「古代エジプト人と神々」『明倫歯誌』 7 (1) pp. 39-44。

2015 「古代エジプト人と死者」『明倫短期大学紀要』 第 18 卷 2 号 pp. 3-10。

エリアーデ・M.

2000 『世界宗教史 1 —石器時代からエレウシスの密儀まで (上)』 (中村恭子訳) ちくま学芸文庫 筑摩書房。

星野英紀他編

2010 『宗教学事典』 丸善。

杉勇他訳

1978 『古代オリエント集』 (筑摩世界文学体系 1) 筑摩書房。

田澤恵子

2009 「創造」あるいは「再輸入」? : 古代エジプト新王国時代における女神ケデシェトの図像表現」『オリエント』 第 52 巻第 1 号 pp. 63-83。

2015 「古代エジプトの女神」『世界女神大事典』 原書房 pp. 240-264。

2017 「古代エジプトの神話」『古代オリエント カミとヒトのものがたり』 岡山市立オリエント美術館・古代オリエント博物館 pp. 14-16。

月本昭男

2017 「古代メソポタミアの神話世界を瞥見する」『古代オリエント カミとヒトのものがたり』 岡山市立オリエント美術館・古代オリエント博物館 pp. 17-19。

デーヴィッド・R.

1986 『古代エジプト人—その神々と生活』 (近藤二郎訳) 筑摩書房。

平藤喜久子

2017 「日本神話」『古代オリエント カミとヒトのものがたり』 岡山市立オリエント美術館・古代オリエント博物館 pp. 30-32。

平山東子

2017 「ギリシア・ローマの神話」『古代オリエント カミとヒトのものがたり』 岡山市立オリエント美術館・古代オリエント博物館 pp. 11-13。

プルタルコス

1996 『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』 (柳沼重剛訳) 岩波文庫青 66 岩波書店。